流離譚（新潮連載　昭和五十四年七月号の第三十七回～第四十三回

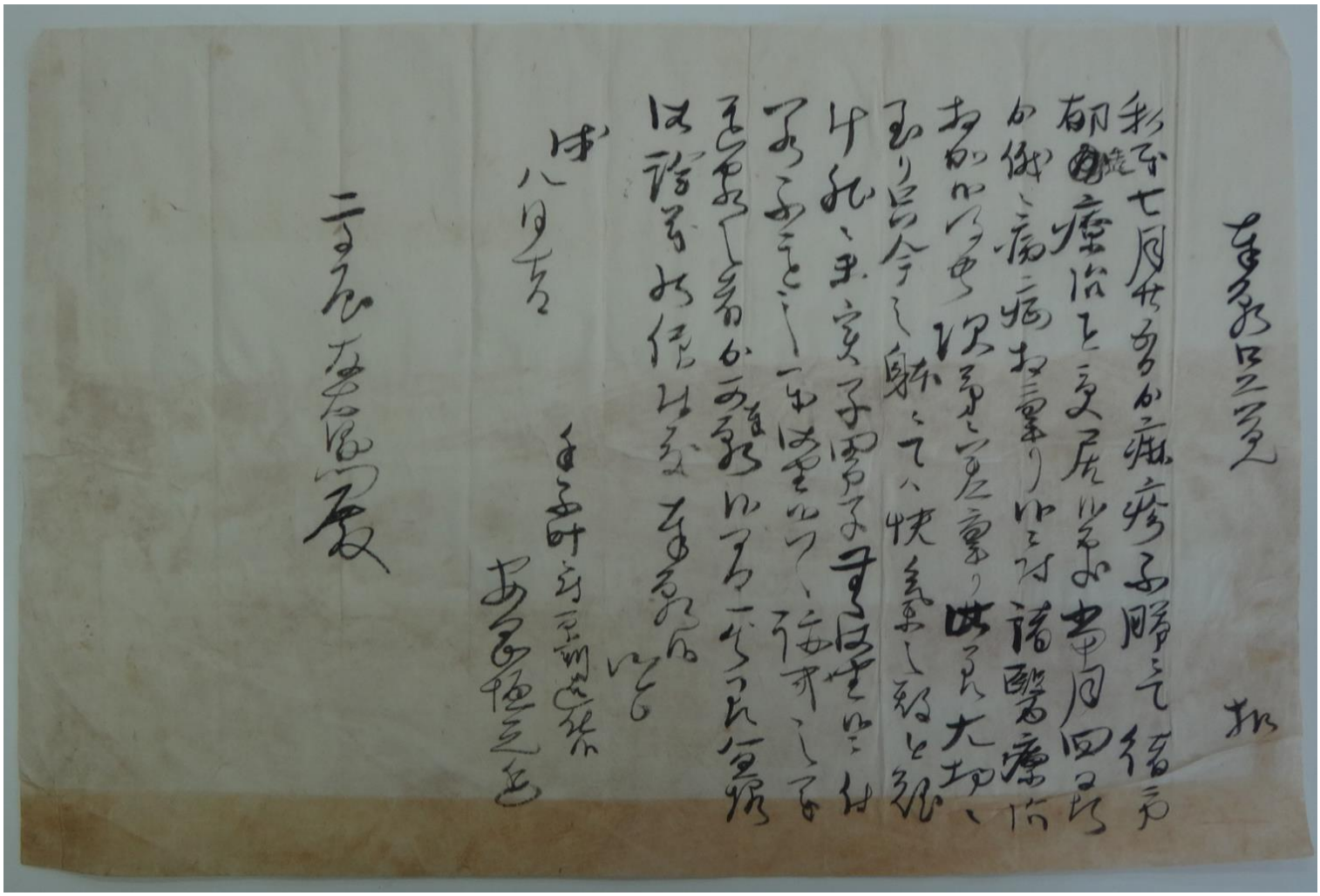
昭和五十五年二月号）

新潮第三十七回の出だしに

閏四月二十一日の今市攻撃に失敗した大鳥圭介麾下の会津軍は、・・・とあります。その後も、流離譚は会津での戦いの話が続きます。この戦いに高屋左兵衛の名が出て来ます。

恒之進が文久二年参勤に従い大坂で麻疹に罹り死

去します。死去に際し、家存続「弟に覚の引継ぎ」の願いを文久二年八月に上司に出しています。そのお陰か不明ですが、お下の家は繋がります。その上司の名が高屋友右衛門で流離譚に出て来るのは高屋左兵衛ですの



で、流離譚とは全く関係ない話ですが高屋友右衛門について次の記録があります。

文久二年「閏八月二十八日　山内豊範・小南五郎右衛門・高屋友右衛門ら、京都河原町長州藩邸をたずね長州藩主毛利敬親と面談し尊攘の義を結ぶ」とあります。恒之進が家の存族の願いを出した直後、藩主に重宝されていたと思ったのですが、一年後の「元治元年五月六日高屋友右衛門　大御目付並び御軍備御用且武者奉行　兼帯御留守居物頭共被差免御馬廻被仰付之」重役罷免・格下げされています。

武士サラリーマンの厳しさ！

第三十八回の書出しは、

第二次今市攻防戦でも土佐軍の死傷者は全員銃砲弾によるものらしい。・・・・

一、袋打　　中島佐太郎

一、即死　　同馬取　京二

この後に袋打に関連して、何故と思う程、長く書いています。

そして戦いが終らない中、こんな記載がある。

・・だいたい、覚之助たちは三月十五日の江戸城総攻撃をめざして進撃してきたので、江戸を陥落させてし戦争は終り、土佐へ凱旋できるものと単純にさう考へてゐたやうだ。・・

と続き終わらない戦争を書いている。

第三十九回の書出しは、

白河の攻城戦に圧倒的な勝利を収めたはずの官軍が、・・・要するに補給線がのびきつて、兵員をはじめ食糧や弾薬などの補給がつかなつたからであるが、・・

同じ過ちを繰り返したのが昭和の日本の軍隊か。

以降、大島軍との戦いが述べられていてこの回の最後に

覚之助自身は、六月十二日づけの手紙で、この戦闘の前後の模様を述べてゐる。と覚之助の手紙を紹介し、江戸の旅舎より一翰謹啓、（略）

この手紙の末尾に

・・・・・・・・・・・。恐々謹言

六月十二日夜

大人様

権馬様
平太郎殿
馬兵衛殿

二白、白河は気候の違・・・・

とあります。大人がお西の文助、お上の権馬、本家の平太郎、馬兵衛と連名となっています。平太郎は覚之助の長男、馬兵衛は覚之助の次男で名は馬次郎で慶應二年覚馬の養子となりお下を継いでいました。慶應三年覚之助が出獄した時、馬次郎はお下の家を継いでいましたので、慶応三年の手紙で初めて連名

の中に乗兵衛を入れたのは不思議に思うが、お下は佐幕派で別扱であったのか。

第四十回の書出しは次です。

それにしても、四月二十四日の宇都宮落城以後、大鳥軍の行動は・・・

以降三春での戦いなどが記載されているが、知識不足でこの回のコメント無しとします。

第四十一回の書出しは次の通りです。

板垣部隊が本宮を占領した七月二十七日、・・・

覚之助の死が近づき、戦況を覚之助の手紙で書いています。この手紙の末尾の宛先が何か不自然でそれを紹介します。

・・・いよいよ八月二十日、会津若松へ攻めこむことになるのであるが、その前に八月十八日に出した覚之助の手紙によつて、一応これまでの戦況を振り返つておくことにしよう。

無事。

二本松より一筆謹啓。・・・

・・・・・・・・・・・・。□□□申し上げ候。

八月十八日

大人様

権馬様

平太郎殿

長ながと引用したが、じつは覚之助の手紙としてはこれが最後のものである。・・・

この手紙には何故か馬兵衛が外している。

第四十二回の書出しは次の通りです。

八月二十日、官軍は全軍、二本松を出発。・・・・
これに続いて若松城攻撃の模様が書かれています。
大砲に関す記載を抜き出すと
・・どつちにしろ官軍は、この第三陣地では何の抵抗もうけずに保成関門を占領し、大砲五門と多数の木砲を捕獲とある・・
大砲とは木砲と違い、金属で出来ているのを書き分けているのだろうか。家に木砲らしきものがあった。これを砲の専門家「宇田川武久」様に問い合わせると、木砲でなく、砲の台であるとの返事がき

半円の溝の片側は太く
段々若干細くなる。
全長：１７４ｃｍ
溝幅：２９ｃｍ

ました。砲台ということは、砲も造る計画があったと思われる。これを造ったのは恒之進、現在雪隠と呼ばれる場所で火薬製造の計画していた。だが、どこで使う積りだったのだろうか。

この若松進撃の戦いの中で次の記載がある。

：板垣の盟友、牧野群馬

（小笠原唯八）は、会津盆地を見はるかして、昂奮のあまり、

「ああ、われ死所を得たり」

とさけんだといふが、土佐からはるばる幾山河こえて、ここまで二本の脚で歩きとほしてきたことを想へば、・・・牧野はその日午後、若松城下で実際に重傷を負ひ、数日後に死ぬことになるのである。

小笠原は権馬と容堂から京都の退去（早追）の罰を受けた。が、その後、また抜擢された戊辰戦争に参戦した。覚之助も同じように、刑を受け獄に入り、

出獄し参戦した。藩を恨むのでなく、戦いに駆り立てたのは何でしょうか。

この回の最後に

かうして、この日から丸一箇月、鶴ヶ城は官軍の包囲攻撃を耐へ抜くことになるのである。

耐えた城と、２年前に友達が行った時のと明治初期の若松城を並べます。古い写真には鯱はないが、最近の写真では鯱があります。戦争で撃ち落とされたと思ったのですが、そこまで届く砲はなかったで

しょう。色々の経緯があるようですが、再建された城には鯱が取り付られました。

冬まで持ち越せば、戦いは変わっていたでしょう。

第四十三回の書出しは次の通りです。

八月二十三日の攻撃だけで、土佐軍の戦死者は二十六名、負傷者は二十名にのぼった。

これに続き覚之助の死んだときの状況が色々書かれているが、その中で次を紹介します。

・・・法学士楠瀬保馬著『近藤勇と土佐勤王党』といふ昭和四年に高知県で刊行された本である。表題ははいささか奇妙であるが、目次に「本書の記事は悉く事実」と断ってあつて、叙述はたしかに甚だ具体的である。・・・

覚之助の亡くなった場面はこの本を参考しています。流離譚を引用しません。この本はデジタル化し登録されていますので、興味ある方はそちらをご覧ください。この本には取材時のことも書かれています。安岡覚之助のことを取材した時の一部を紹介します。

安覚死状中「長軍相圖」云々は安亮が長子雄吉君に雄吉君の弟秀夫君が筆者に語れるもの「耳の後に命中」云々は安覚の従弟にして安覚家現戸主安岡正熙君の實兄たる藤田亀之助君（七十一歳）の話・・

・・安覚従弟の未亡人たる安岡房子様の御手紙によると「安覚は身長五尺二寸位やせぎすな固い體で見かけも可愛らしい人で」あつた由。藤田亀之助君の話と安岡喜太郎君の話は房子様令息安岡秀彦君より筆者に通知して下された。

不思議思ったのは、房の手紙にある覚之助の身長などです。房は文久元年生まれで、覚之助は文久三年に親類預かりになっています。慶応三年に出獄しますが、六歳の房が身長を寸までどのように測り記憶できるでしょうか。考えられるのは覚之助の妻万

喜に聞いたのか？　本が出された昭和四年には万喜は亡くなっています。房は漢字が書けないので、秀彦が代書したのでしょうか。

楠瀬さんが秀彦を尋ねてきたことは事実で秀彦の昭和３年、４年の日記に残っています。最初のやり取りと最後のを掲載します。

昭和三年八月十九日　日曜　天氣　曇

昨日ノ嵐ノ跡ノ藤□ナド掻キ集ム

楠瀬ヨリ覺之助並ニ嘉助両氏傳記

ヲ贈ツタ禮状来ル尚ホ仝氏ニ手紙

ヲ書キ問合セノ事項ニ對スル全部返
答セリ
發信　楠瀬保馬
受信　別役駒　楠瀬保馬

昭和四年一月六日　日曜　天氣　晴

・・

楠瀬保馬氏ヨリ覺之助サン戰死ノ
時ノ模様ニ就タ又々問ヒ合アリ
受信　楠瀬保馬　年賀

一月八日　火曜　天氣　曇

組合ヘ行ク
組合ヘ藤田亀之助サンニ来テ貰ツテ
覺之助様戦死ノ時ノ模様日時ヲ聞ク

流離譚は覚之助の死で戊辰戦争の記載は終ります。

死んだ後も戦いは続き「南山御蔵入　歴史街道図」に「戦場は山の奥深く」の記事を見ると、戦争は９月末まで続き、「９／25布沢で会津軍、西軍会談、休戦を定める。」で終っています。まだ、休戦中なのでしょうか。

●戊辰戦争と奥会津
戦場は山の奥深く

戊辰戦争は慶応四年（一八六八年）一月の鳥羽伏見の戦いから翌明治二年函館五稜閣の戦いまでをいう。

このうち特に会津領内における戦いを会津戦争という。

激戦地は福島県の中通りから猪苗代、会津若松方面であったが、奥会津地域も戦火を避けることはできなかった。

越後方面から八十里越を抜け、関東方面からは尾瀬をうかがい、また山王峠を通って、西軍はひたひたと会津に迫ってきた。迎え打つ会津勢は藩兵、幕兵、そして旧山ノ内　河原田家ゆかりの農民たちであった。

【戦いの経過】慶応四年（一八六六年）

・（閏）4／27　山ノ内隊、会津藩と共に小出島（新潟県）にて西軍と会戦。

・5／22　河原田治部隊尾瀬を越え戸倉（群馬県）の西軍を急襲。

・8／29　日光口の西軍、山王峠を越え田島町へ。

・9／2　越後口の西軍、八十里越②Ⓔ より只見町へ。叶津番所③Ⓔ に本陣。以後伊南川筋を遡り小林から本隊は布沢、吉尾峠③Ⓗ を経て野尻へ。

・9／9　佐川官兵エ田島代官所奪回（④Ⓘ）

・9／19　同隊、舘岩村塩の原で戦い勝利。舘岩村塩の原で戦い勝利。

・9／20　同　伊南村青柳、南郷村大橋で西軍を破る。

・9／21　伊南村道城、南郷村木伏でかなり大きな戦闘、いずれも佐川隊が勝利。

・9／22　河原田治部隊入小屋（現在は南郷村東）占拠。

〔この日若松城開城〕

・9／23　河原田・佐川隊合流して山口付近で西軍と大戦闘これを撃破。

・9／24　佐川隊小林へ進出。野尻の西軍本陣を狙う。

佐川別同隊田島本陣より舟鼻峠④Ⓘ を越え、大芦の西軍を攻める。矢の原③Ⓗ などで激戦。

・9／25　布沢にて会津軍、西軍会見、休戦を定める。

〔戊辰戦争関連史跡〕

・慈恩寺　田島町中町
官軍十九人墓がある。④Ⓙ

・龍福寺　田島町糸沢。西軍芸州藩の落書きがある。⑤Ⓘ

・笹沼金吾の墓　下郷町大内③Ⓚ

・長福寺　只見町只見③Ⓔ、越後口西軍の本陣が置かれた。

・八十里越（はちじゅうりごえ）